

平成 27 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書 I

【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

法人名	学校法人 聖公会北海道学園
-----	---------------

概 要

モデルスクールの概要（平成 27 年 4 月 1 日現在）

	モデルスクール名	在籍者数	教職員数
1	聖ミカエル幼稚園	89 名	18 名
2	岩見沢聖十字幼稚園	120 名	16 名
3	苫小牧聖ルカ幼稚園	66 名	18 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

聖ミカエル幼稚園

キリスト教保育を中心に据え、キリスト教精神のもと、障害のある子供も障害のない子供も共に生活し、互いを受け入れる教育を大切にしている。

園には、様々な障害種の幼児が在園しているが、教員たちが「ぶどうの木」をはじめたくさんの研修会、学習会に意欲的に参加することにより、大変落ち着いた、どの子供をも成長させる保育が行えていると自負している。

岩見沢聖十字幼稚園

毎年、発達支援センターからの入園希望者に優先枠を設け、受け入れるようにしている。その他の幼児でも、入園前の面接で障害の有無をよく聞き、職員の配置や教室環境を整えて、全員受け入れるようにしている。職員配置を多くしながら、健常児とすべて同じ空間で、できる活動はすべて一緒にしているので、子供たちも保護者もその環境が当たり前だと感じている。

苫小牧聖ルカ幼稚園

キリスト教保育を中心に捉え、キリスト教の精神のもと、設立以来、障害のある子供も障害のない子供も共に生活し、お互いに人格と個性を尊重し支え合う人間関係を築きあげる保育を目指し行ってきた。

以前は、保育者と保護者との連携に重点をおき、毎月のケーススタディを組織的かつ連続して検討・分析・記録を行ってきた。2014 年度より、法人内の特別支援教育事例検討会「ぶどうの木」の中で、教職員の特別支援教育のスキル向上を目指している。

その成果か、近年は特別支援の入園希望者が増加している。

2. 取組の概要

モデルスクール共通

1. 定期的な事例検討学習会「ぶどうの木」を開催し、教職員の発達に関する知識と実践的なスキルを向上させた。
2. 親子向け講演会を開催し、インクルーシブ教育への理解を広めるよう、取り組んだ。
3. 検討学習会のまとめ、検証として、経過報告集を作成した。

聖ミカエル幼稚園

1. 特別支援コーディネータを中心とした取組
 - ① 「個別の指導計画」の作成、園内の検討委員会の開催
 - ② 関係機関との連携・・・臨床心理士による発達検査の実施、必要に応じた連携会議の実施（発達支援員、園児の通う事業所、園児の通う病院、臨床心理士、保護者、担任等）
 - ③ 年長児全員を対象に、進学先小学校との連携（小学校担当者の「参観日」を設け、幼稚園での日常の様子を实际見ていただく。卒園児の進学先小学校訪問、参観、行事への参加）
 - ④ 教職員への研修会の案内
 - ⑤ 保護者からの教育相談への対応
2. 園児、保護者に対する啓発活動
 - ① 講演会の実施
 - ② 啓発活動の検証
3. 事例の対象となる児童生徒等に対する「合理的配慮」の提供に関する取組について
 - ① 「個別の指導計画」をもとにした保育
 - ② 園内、法人内での事例検討会議等による、指導計画の見直し
 - ③ 障害に応じた補助員の配置
 - ④ 障害に応じた教材、遊具の確保障害に応じた生活環境の充実（視覚優位の子供への指示の仕方、肢体不自由児の移動スペースの確保等）

岩見沢聖十字幼稚園

園内では、特別支援コーディネータを中心に、関係機関各所との連携を日常的に行っている。保護者との合意形成では、3歳児検診で心配な点が見つかった子供や、日常の保育の中で教職員が気付いた心配な子供については、最初は言葉の教室などで相談を受けてもらい、さらに必要な子供については発達支援センターへ紹介してもらうなど、段階を踏んで関係機関に関わってもらえるようにしている。それでも受容に至らない保護者に対しては、子供の成長した面と、課題のある面を、たとえ小さなことでも共有して情報量にズレが生じないようにこまめな連携を心掛けている。また、市内の発達支援センターの先生に来園をお願いし、該当する園児の集団活動の様子を観察してもらい、その後担任・担当職員との相談活動を行っている。また、合理的配慮協力員である大学教授に来園をお願いし、観察のほか、担任・担当職員への指導や、保護者との懇談も行っている。

看護師の必要な病児の受け入れに関しても今後の課題である。

苫小牧聖ルカ幼稚園

- ①保護者との連携を深め、共通理解を促していくためのツールを交換しあえる家庭を増やし、綿密な記録によって個別の課題を明確にしてきた。
- ②障害児の保護者との面談を密に行ない、育児の不安や子供との関係作りの困難さを共有してきた。
- ③苫小牧市内の療育機関・医療機関と幼稚園とのカンファレンスを行ない、各機関の異なった視点からの指摘を参考にしてきた。

3. 成果及び課題

モデルスクール共通

定期的な事例検討学習会を開催することにより、現在対応している障害種、対応していない障害種どちらに対しても障害への理解を深め、保育に携わる職員の心構えや具体的な対応の方法を学ぶことができた。この、学習会は、回を追うごとに参加者が増え、積極的な意見も出てきており、実り多い学習会となっている。今後も、合理的配慮協力員の先生のご指導を仰ぎ、この学習会を続けていきたいと考えている。また、職員研修に小山内美智子さんを講師にお呼びし、実際に障害のある立場での社会生活についてお話ししていただいたことで、インクルージョンの意義を考える機会となった。

聖ミカエル幼稚園

保護者を対象とした小山内美智子さんの講演会では、障害のある子供の保護者にとっても、障害のない子供の保護者にとっても、子育てや障害を持った方々について学ぶ良い機会となった。来年度も社会の中で生活し、活動している方に講演をお願いし、地域にも呼び掛けていきたいと考えている。また、来年度は法人内だけの研修ではなく、インクルーシブ教育を実践している他の幼稚園、保育園との連携を取り、学びを深めていきたいと考えている。

岩見沢聖十字幼稚園

専門家に具体的な状況や園児本人を知ってもらったうえで相談できるため、迷いながら指導していた教職員が、自分の指導に確信を持ったり、新たな方法を知ったりしながら、進むことができた。また、保護者への相談活動にも、自信をもって臨むことができるようになった。また、直接保護者との相談活動をしてもらったことで、保護者の合意がスムーズに行えた事例もあった。幼稚園卒業後の小学校との連携では、学校によって受け入れ態勢や相談機能、連携用書類の有無が大きく異なる。当該教育局で作成した個別支援計画書も存在するが使用されていない状況なので、市内全体での改善が必要である。

苫小牧聖ルカ幼稚園

事例検討学習会での学習を重ねていくうち、何げない保育の流れの中で支援の必要な子供たち以外にも、気になる子、何となく目につく子など、保育者として見過してしまいがちになる子供が意外に多くいることが見えてきた。また、各園の事例を検討していく中でも、もう少し深く子供に対する対応のしかたを検討していく必要を感じた。

障害があってもなくても、子供同士活気に満ちた刺激を受けて成長し、仲間と共に生活する中から多様性を受け入れる心が自然に生まれる。その様な環境を作りあげていくためにも事例検討学習会の存在が大きいと思われる。

今後は法人内の取組として行ってきた学習会や特別支援への理解を深める活動を、市の特別支援教育活動の推進へとどのようにつなげていくか、モデルスクールとしての役割を意識して進めていきたい。